

小西：漫談のように聞いていただきたいと思いますけれども、大変大風呂敷を広げまして、広いユーラシア大陸をどのように区切ってとらえるか。それからまた、本来私は考古学をやってきたことから、今から 5000 年前以来の歴史的な流れをも踏まえて、南アジア世界というのがどのように形成されてきたかというのが私の関心事でありました。

それで、この南アジア世界なるものをどうとらえるか。難しい問題です。ただこれまでは、ただ一言「インド」言われてきた世界が、「南アジア」という、もう少し広い、ユーラシア大陸の中でどのような位置を占めるかということを考えてい。そしてそれに当たっては、かつて梅棹忠夫先生が『文明の生態史観』という本をお出しになって大評判になりましたが、生態系などをも視野に入れて地域をとらえる必要があるのではないかということです。

まだ私も若かったころですが、1971 年に松田寿男先生が『アジアの歴史』という大変優れた本をお出しになりました。ブックレットのような本ですが、大変インパクトの強い本でありまして、その先生が、例の玄奘三蔵の「大唐西域記」の序文をとりあげ、そこでアジアが 4 つの国からなっていることに注目しました。当時はまだアジアなんて言葉は使っていませんが、北の馬主（国）、西の宝主、東の人主、南の象主という 4 つがあがっているのですが、それを松田先生は地文的に斜めに切ると乾燥アジアと湿潤アジアに分けられると。また人文区分として

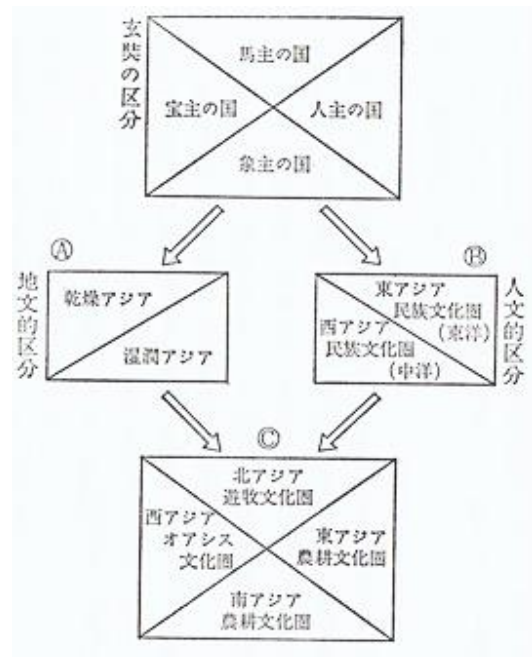
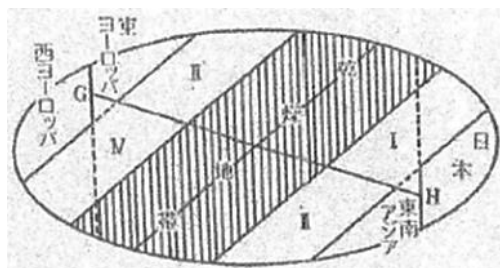


図1 アジアの四大文化圏

(松田寿男氏原図) [松田 1971]



I：中国世界；II：インド世界；
 III：ロシア世界；
 IV：地中海・イスラーム世界
 (梅棹忠夫氏原図)

図2

は東アジア民族文化圏と西アジア民族文化圏、これは東洋と中洋という言い方をしておられますが、これまた違う角度で斜めに切って、それらをすべて重ね合わせて言い換えると、北アジアの遊牧文化圏、西アジアオアシス文化圏、南アジア農耕文化圏、東アジア農耕文化圏となるという(図1)。面白い発想だと思いました。これを先の梅棹さんの図に重ねてみますと、これまであまり重要視されてこなかった乾燥地帯をものすごく大きく取っている(図2)。そしてそこには中国(I)とインド(II)の一部がそこに入る。すなわちインド世界を見てみると、西ないしは北西部が乾燥地帯

に引っ掛かり、それから南東が東南アジア、すなわち湿潤の海に引っ掛かるという、そういう世界がインド世界だということが見てとれる。とすれば、この図をどのように展開するかというのが、一つの大きな課題になってくると思います。

その前に、古代インドの人たちがインド世界というものをどのようなイメージでとらえていたかということ、ちょっと4つほど例を挙げてみました。古いところから言うと、エラトステネース、前4世紀末のもの（**図3**左上）。これはもちろん、中に書かれた地図は今の地図を使っていますので、彼がこんな形にインドをとらえていたわけではありませんが、距離が出ているのです。こういうひし形をした枠組みです。このひし形は、

大事にしていこうと思いました。それから、どうしても地理学の歴史から言っても、プトレマイオスの地図というのが必ず出てまいります（**図3**右上）。先ほどの梅原先生の資料にもあった地図では、なんと1489年という遅くなってまで、ほとんどプトレマイオスと変わらないインド認識がつづいているのです。つまり東にガンガーが流れ、西にインダスが流れ、そして南にインド洋が広がっている。そこに何本も川が流れ込んでいるのですが、この何本も流れ込んでいる川は、形はおかしいですが南インドの半島部のさまざまな川を意識していた可能性がある。つまり、のちの歴史学者は南インドをあまり問題にしないのですが、プトレマイオスはもう既に、南インドに川が流れ込んでいるベンガル湾やインド洋、西のほうではアラビア海、そこに流れ込む大河を意識していたというのは面白いところです。

それから、インド人はもっと抽象的な、面白い考え方をします。古代叙事詩の『マハーバーラタ』ではこういうふうな切り方をして（**図3**左下）、真ん中に中インドを据えてまわりに三角を置いた。またヴァラーハミヒラという人はインド世界をきれいなハスの花になぞらえて、8弁の蓮華を中心に向けてくっ付けてインド世界を表す（**図3**右下）。つまりこれが一つの宇宙的な曼荼羅になっているというとらえ方をしていたことが注目されます。

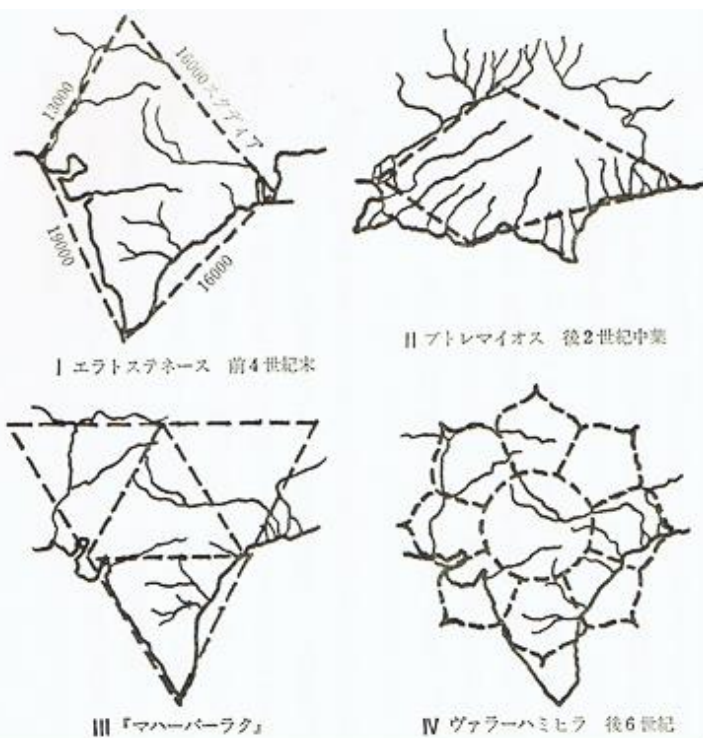


図3 古代インドの地理学的イメージ

(カニングハム『古代インド地誌』による)

[小西 1981]

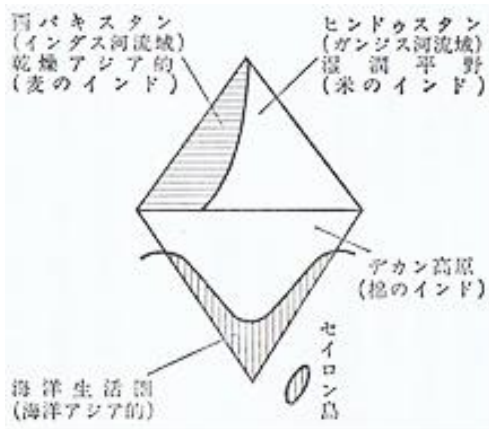


図4 インド亜大陸の史的構造
(松田寿男氏原図) [松田 1971]

それはともかくとして、問題は先ほどの乾燥アジアと湿潤アジア。それを整理しますと、松田先生は図4にあるように、今日のパキスタンのほとんどが入るインダス川の流域と、インド側のヒンドゥスターン平原、この2つに北半分が分かれるだろうと。そして、インド世界が今も北インドと南インドに分けられるということ自体には異論はなかったのですが、ここでは北をさらに2つに分けた。そして、その西側が乾燥アジア的「麦のインド」、そして東側が湿潤平野で「米のインド」。南のほうが面白いです。これをどういうふうにかけるかがこれからの大きな問題になるわけですが、初めて「海洋生活圏」というものを、この半島部

の南インドの海岸に面したところ、ぐるりとベルト状にこの海域を、海に面した地域とに設定したわけです。海洋アジア的というか、そういう海との交渉を持った生活圏というものとしてとらえた。これは大変重要な見識だと思います。

ただ、南インドの内陸部を「綿のインド」としてしまっただのはちょっとどうなのかなという。南をどうするかというのは本当に誰もが苦勞しているところです。インド考古学の泰斗、オールチンという人がケンブリッジにおりますが、この人は特に北のほうで面白い説を出してまいりました。図5は私なりに整理したものですけれど、北にはヒマラヤ山脈に囲まれ、西側はカラーコラム・ヒンドークシュからスレイマーン・キールタル山脈に囲まれたベルトがある。ここをよそからの文化を受け入れるフロンティア地区として、I a、I b、I c、I d というふうに分けました。そして内陸ではII a がガンダーラ地方とインダス平原、II b のガンガー平原。さらに、これは初めて出てくる地域なのですが、II d があります。ここは地形的に言うとなンディヤ山脈だとかがある中部山地で、人類学的にも考古学的にも非常に豊かなところでありました。ただ、ここはまったく大王朝が展開したことがない、いわば遅れた地域だと言われてきたところですが、そのように遅れたと言い切ってしまうことのできない辺境だからこそ、そこから全体が見えてくるような大変重要な周辺地域であると、以前から私も考えていたことであります。

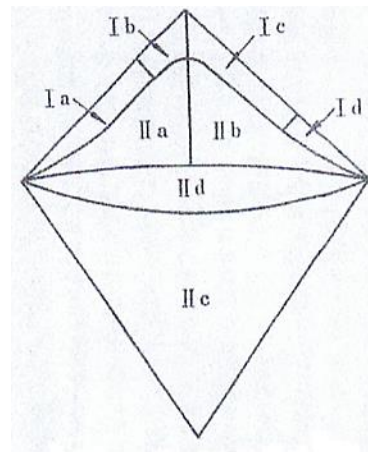


図5
オールチンのとらえた亜大陸の地域区分 [小西 1981]

したがって、それを踏まえ、さらに 86 年まで下りますが、私が作った図が、このひし形の中にいろいろな三角や線が描き込まれた、I からIVまで大きく分けた地域と、それぞれをさらに a から c などへと分けた図であります (図6)。

このような文化領域の中でも、特に人とモノの移動によって文化変容を強く促した地域が、フロンティアの中でも I a が重要です。ここには有名なハイバル峠もありますし、さらに南の

ほうにも西からのいろいろな文化の入り口、玄関があって、ここは非常に活発に、内陸の文化展開を促したところだったのです。

しかし、これはいわば陸のシルクロードの通り道として大変重要なところとされてきたところですが、それだけで説明が付くかと言えばそうではないと。なかなか難しいところもあるのですが、北東の I b に走るヒマーラヤ山脈。たしかに越えにくいところですが、私は一方で、最近本にまとめた『手すき紙の歴史』(デリー刊、2013) という本に、チベットからネパールを通じてインド平原へインパクトを与えた紙の道、これが意外にもヒマーラヤを越えて南に入ってくるという可能性についてふれました。8,000メートル級の山も越えてくるという、ちょっと考えられないような動きもありまして、しかも、驚いたのは、カシミールでフィールド調査をやっておりましたときに、その人たちの祖先がサマルカンドのほうからやってきたというからすごい。どうやってパミール高原を越えて、サマルカンドからカシミールまでやってきたのだろうと。そういうルートすらあったということにびっくりしたわけです。

また、いわゆる北のほうをインダス平原とガンガー平原、II a と II b に分けることには問題がないのですが、私はやっぱりここに II c という、a にも b にも入らない内奥の一角を置くべきだと考えました。アジ研の所員でもある、竹中千春さんが『盗賊のインド史』(有志舎、2010) を書かれましたが、ダークと呼ばれる盗賊・殺人集団が活躍するのはここです。全く王朝が形成されない、むしろ王朝に対してゲリラ活動を行っていくような連中が巣くっているところ。もしくは、王朝がつぶされて一旦ここへ引き揚げて、そこで力をためて何とか巻き返してやろうというような力がそこに集まっているというような特別なところですので、私はここに II a、II b とは違う II c を設けておきたいと思ったわけです。

オールチンさんも II d として設定いたしました中部山地、これはむしろその両端で海に大きく開けていた。私が III としてクサビ型に描きましたこの地域の西側が、ことに活発にいろいろな動きをするわけです。海に開けたというだけでなく、ちょうど北と南のそれぞれの文明・文化が行き来したコリドー、すなわち回廊であったと歴史的にも考えられますので、あえて III というクサビ形の地域をここに置いたわけです。

南方では、I c、I d とした海に沿ってぐるりと広がっているベルトがあり、その重要性は言うまでもない。先ほどポピュラーな言い方でシルクロードという言葉を使いましたが、陸のシルクロードに対する海のシルクロードという形で、I c は西のほうから、古くはメソポタミア文明とインダス文明の交流があったように、非常に古くからこの地域は、西からの文化をとらえた地域であったのです。

それに対し、南東の I d のほうは、ここから東南アジアに向けてさまざまな文化を発信して

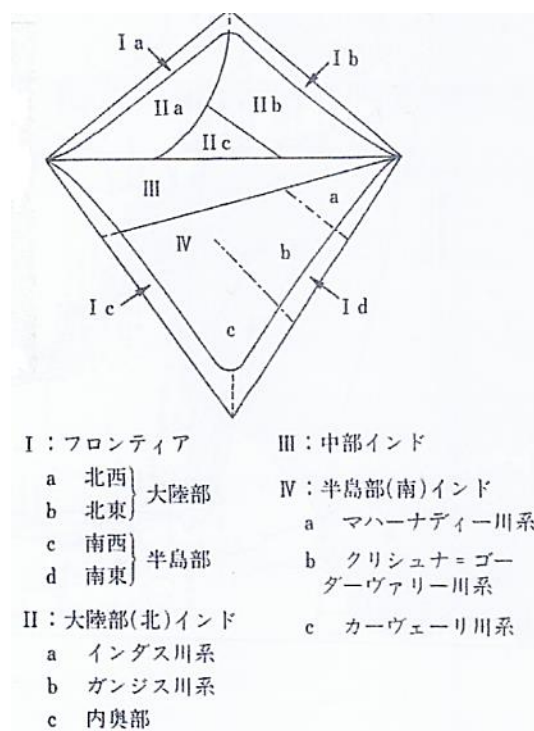


図6 インド亜大陸の文化領域区分

[小西 1986]

いく、そういう地域だった。そのためにはここでとりあえずIVとした南インドをただ一言でデカンと言ってしまふのではなく、どのようにこれを区切って考えていくのかということがまた大きな課題になります。私はここで半島部と呼んでいる南インドを河系で分けてみたい。これは北でもインダス河系と、ガンガー河系とに分けたように、北から順にマハーナディー、次いでクリシュナ・ゴダーヴァリー、これはさらに2つに分けても結構ですが、それから南のカーヴェーリ。これらの河系はそれぞれが独自の文化圏をなしているにしてもはっきりと分けられないので破線で分けていますが、実際にこれらの地域での文化の流れをみると、これはむしろ考古学的な証拠からいえることなのですが、上流のほうにその文化の発祥があって、下流、河口に向かうに従ってその文化が膨らんで、雪だるまのように大きくたくましくなっていくわけです。そしてその河口のところに、海に面した海港、海市、あるいは、港町ができます。それが発達して、後にそこで王朝を形成することにもなります。この海市、港市の発達とその背後の文化との関係というのは家島彦一先生や弘末雅士先生が立派なご本をお書きになっていて、まさにそのとおりのことであります。

そして、それぞれの河系の間には、そんなに高くはないのですが丘があったり山があったりということで、それを越えると文化ががらっと変わっていくということもあります。南はそこに注目しながら、もっと問題にしていけないのではないかと思います。

そういうわけで、非常に概念的な、しかも定規でもってえいやと引いてしまったような図ですから、どこまで信用できるのかというのは私自身あまり自信がないのですが、だったらこれが実際のインドの地形と、また地域の歴史とどう重なり合わさるのかが問題です。それを考えたときに、この図の一番大きな欠点というのが、Ⅲの西の付け根のところあるいはI bとII bが出会う、さまざまな文化がそこで吹きだまっている東インド一帯、ここにもっときちっと注目しなければいけないのではないかとすることに気が付いて、いろいろ調べ始めているところです。

殊に、海を通じてのさまざまな交易のあり方については、家島彦一先生の『海が創る文明』（朝日新聞社、1993）を初めとする一連の著書がありますが、8世紀から15世紀のインド洋海上ルートと主要な交易港を示す図を、**図7**として置きました。

ここではインドを図の中心に置いてくださっているののでわかりやすい図になっていますが、家島さんの専門分野は、どちらかというと西のほうの交易、アラビア海を通じての交易という仕事ですので、それでインド辺り、南アジア周辺を見ても、その西海岸、やや北のほうから言えば、グジャラート地方からずっと一番南端のケーララに至るまでのマラバル海岸に至るこの辺りのさまざまな港市、港町が航路上に書いてあります。

実際、やや北のほうから見てみますと、海に面したところはインダス川河口のシンド地方の南端ですが、ここからさらに、サウラーシュトラ半島-カーティヤール半島をちょっと回って、グジャラート地方のカンバーヤ、バルージュ（ブローチ）、スーラトに至るルートが見える。スーラトというところは後に東南アジアとの交易で日本にも影響を及ぼした更紗の語源となる地でもあると言われていて、古来大変重要な交易港であったわけです。

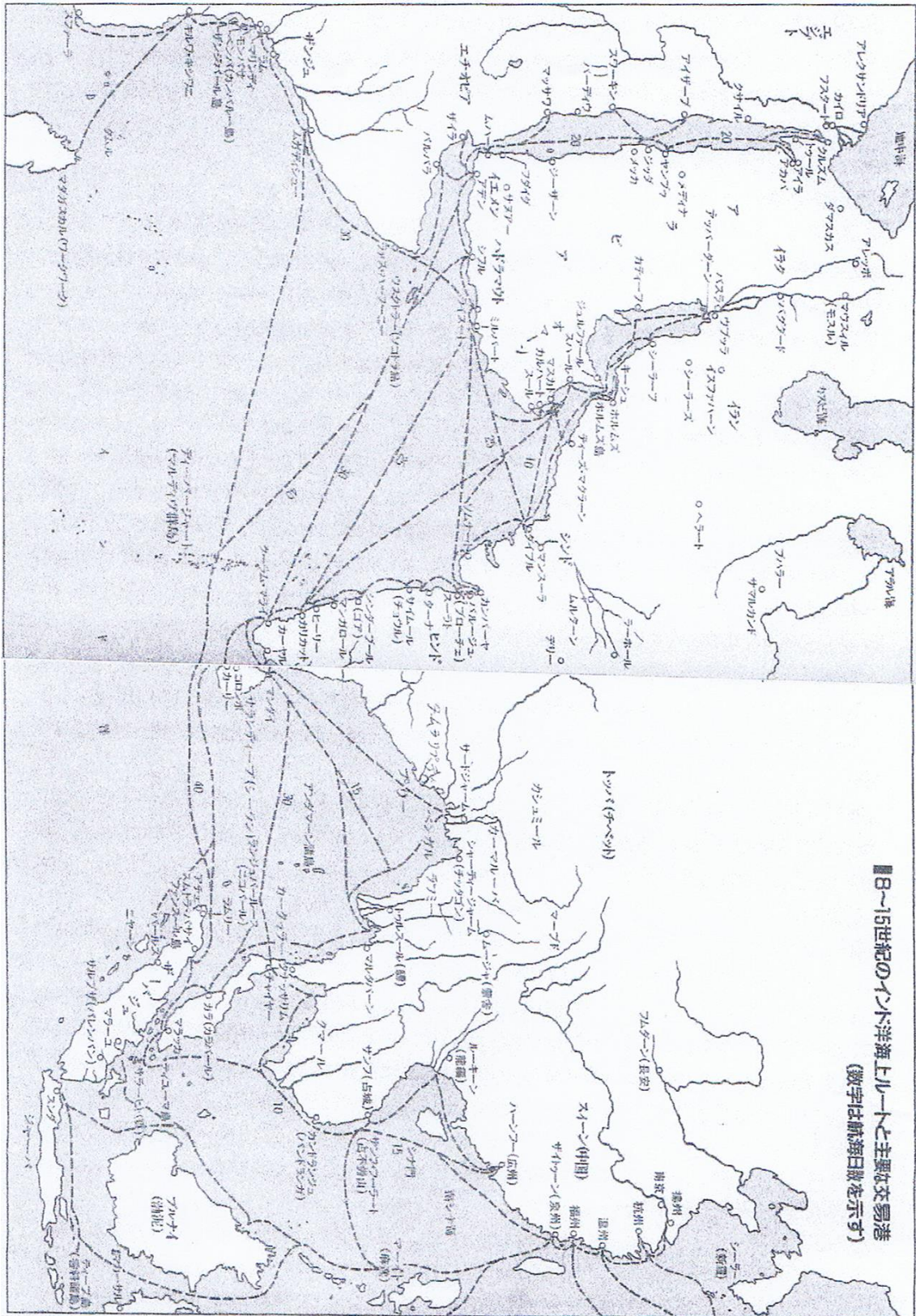


図7 8~15世紀のインド洋海上ルートと主要な交易港 [家島 1993] に小西加筆

そこからターナ。今のムンバイの近くです。この辺りぐらいまでを含めて、どうも一口に南インドの海域辺境とは言い切れない。これを一つの独立した海域文化圏としてここに設定することができるのではないか。そして、その歴史は、さらに南のマラバル海岸、コロマンデル海岸よりもずっと古い、インダス文明にまでさかのぼるのではというふうに考えられるのです。特にこのカンバーヤやまたはブローチ。すなわち英語にいうキャンベイ湾一帯には多くの遺跡があり、それらは遠くメソポタミアのほうとの交易の証拠を示しているのです。つまりその拠点を西からたどっていきますと、メソポタミアのほうではバスラとかシーラーフ、あるいはカティーフなどを通してホルムズ海峡を越し、マスカットやソファールというようなところも通り抜けて、今度は海を東へ渡ってダイブル、つまりインダス川河口に至る、そのような交易路があった。そして、インダスのほうからも、優れた物質文化やさまざまな物産が川を経て、川を下って海に出て、さらに、そこからメソポタミアに至る、またはメソポタミアから物資が海港にもたらされて、川をさかのぼっていく。このような双方向のメカニズムがあったと考えることができると思います。

つまりインダス文明というのは、普通河川文明、つまり河川を灌漑として利用した文明であるかのように考えられていますが、それもあったにしても、むしろ積載量からして牛車なんかよりもずっと大きい船、それに物資を積んで川を上り下りして、この河口の海市、海港で栄えていった、そういうメカニズムであったのではないかという気がします。

つまり典型的な海港、海市のあり方を考えると、物資が内陸から送られてきてそこにたまり、そしてこれが、そこで終点なのではなくて、そこからさらによその世界へ発信していく。またはよその世界からもさまざまな物資、人、物、情報というのがそこに集まって、そこでまた内陸のほうへとそれが伝えられていくという、まさにそういう、文化の終着駅であると同時にそこがスタート地点でもあると、そういう両面を持っているところだと思います。そうとすれば、どちらかという、南のマラバル海岸の典型的な海市であるサイムール、シンダーブール、あるいはゴア、マンガロール、そしてケーララの諸地方。このように、名前は出ておりますが、物資を受け取りはするけれど、そこから何か新たなものを発信していくような力は必ずしもこの海岸は持っていないのです。というのは、この海港のすぐ東側には西ガート山脈という山脈があつて、かなり帯状に狭い地域ですから、ここに大きな勢力はなかなかできにくい。むしろ山を越えれば、そこからさまざまな川が東に流れ出していくわけですが、その流れていく過程でさまざまな物資ないしは人、情報、物資を、方向としては南東に向けて、ベンガル湾に沿った河口へと運んでいく。そこで行きついたコロマンデル海岸では、南インドの大王朝が次々と出てくる。中でも有名なのは9-12世紀のチョーラ朝ですが、河口で大きな力をためたこういう王朝が、今度はそれを東南アジアに向けて発信していくということになるわけです。こうして東南アジアでインド化ないしはヒンドゥー化がはじまる。この枠組みにもいろいろ議論がありますが、その発信地となっていくのがベンガル湾に面したこのコロマンデル海岸であったということをおぼろげに忘れることができないと思います。

ただ、**図7**として挙げている地図で見ると、このコロマンデル海岸部、つまりインド半島の東側がちよっと白過ぎますね。もっと情報を入れたいと思って探したところ、南インド史研究では世界的な権威である辛島昇さんの編著書 [2007] によい地図がありました。**図8**は13世紀から17世紀の南インドの地図ですが、それを見ますと、かなり多くの海港の名前が出てまいります。中国資料から言ってもかなり古いところからこのような名前が出てまいりますし、



図8 13~17世紀の南インド・スリランカ
[辛島編 2007]

非常に活発な、東との、つまり中国とか東南アジアの諸地域との関係が広く深くあったことがこれからもわかるわけです。確かに上流のほうでも、コインバトールとか、マイソールとか重要な都市はあるのですが、東の海岸部、コロマンデル海岸にはチェンナイ(旧マドラス)周辺の、カーンチープラム、またポンディシェリー、ナーガパッティナム、タンジャーウル、マドゥライなど、いずれも王朝を形成していく大変重要な河口の港市が点在していることがおわかりいただけるかと思ひます。

そして、この南の半島部の文化は、海へ流れていくだけでなく、陸のほうのルートも伝わって、マラバル海岸部の最南端のカニヤー・クマリ、つまり英語にいうコモリン岬にまで向けて流れていって、そこで独自の文化をここでも展開していきました。その意味で、南インドの何がどこで一番南インドらしい文化を展開しているかと言え、このような点を見なければいけないと思ひます。

この南インドの研究は、決して遅れているわけではないのですが、これまであまり多くの人の注目を集めてきませんでした。一つに、南インドに関する資料を読むに当たって、英語による資料ばかりに頼ってしまったということがあるものですから、地名の読み方一つ取っても随分おかしな読み方をしているわけです。昨今では次第に地名の読み方もきちんとした読み方に変わっておりますが、一部の地図ではカニヤー・クマリはいまだにコモリン岬です。またはクリシュナー川などは古い地図を見ると、キストナ川なんて言っている。キストナとクリシュナーは確かに発音によっては近いのかもしれませんが、元の意味は全然違ってしまいます。ただ、なかなか覚えられない、または舌をかみそうなようなものが出てまいります、やはりその元の意味が重要です。コモリン岬と言われるカニヤー・クマリとは、少女の女神のクマリを祭っているところという意味です。そのすぐ近くにティルヴァナンタプラムという、これもなかなか発音しにくいところがあるのですが、これが従来トリバンドラムと呼ばれてきたところ。コッチもかつてのコーチンで、コーリコードはカリカット。今の名前で見るとどこのことかと思ひかもしれませんが、そういうような読み替えも含めて、きちっとした研究を進めていかなければならないと思ひます。

このように、南インド半島部の海域ベルト地帯は、東と西とではずいぶん違うことには気を付けたい。またもうちょっと北東部、つまりオリッサからベンガル、アッサムにかけてのところというのもこの地図では抜けてしまっているのが問題です。このベンガル、アッサム地方と

いうところはやはり大変重要なところで、**図9**にはさまざまな産物名が書いてありますが、沈香、麝香、金銀、宝石、象牙、木材、綿布、サイの角、こういうようなものを取り扱った重要なところなんです。ですから、ここはひとまとめにして、ベンガル湾に面した海港を擁するベルトとして、より独立した地域として考えるべきではないかと思えます。

ちょうどそれと相対する格好で、西にありますシンド、グジャラート地方からは宝石、銀、綿布、染料、木材、砂糖、土器が運ばれる。恐らくこれは、この全てがインダス文明の時代にペルシア湾のほうへ運ばれていったであろうと思われまふ。特に、綿布はインダス文明が世界最古であると言われておりますし、木材もまた非常に重要だったのです。メソポタミア地方では木材がほとんど採れませんので、造船上もこれが大変重要であつたらうと思われまふ。ですから、この地域も海のベルト内に一括してしまうことなく、独立してとらえていいのではないかと思えます。

ただ、この地域をも含めて、ぐるりとモルディブ、ラクシャディープというところ、さらにまたそこから南インドの辺り一帯までを含めた広域にわたる海域世界というものを、やはり見て取ることはできるわけで、特にモルディブ、ラクシャディープでは、ココヤシから油や繊維を取って珍重されております。タカラガイ、アンバー香、乾燥魚、べつ甲というものも、この地域の重要な産物です。

それから、ちょっと領域がクロスしておりますが、シンド、グジャラート、またはペルシア湾からずっと伸びた海域が、南インドのスリランカを含み込んで、ここでは各種の宝石、またはジンコウ（沈香）、ダンコウ（壇香）、コショウ（胡椒）、ニッケイ（肉桂）、カルダモン、ジンジャー、木材、織物、米、象牙、熱帯植物、果実、砂糖、ココヤシが主な商品です。中でもスパイスが非常に多い。もちろんスパイスとしては、ジャワのコショウとか、マライ・スマトラ産のものとも重なりますが、ここでもその主要な産物として大きな役割を果たしてきたのです。

そう見てきますと、ベンガル、アッサムのほうから南方に回り込んでいゝるベンガル湾海域世界（ここでは**図9**中の②とされた海域世界）と、その西側のインド洋の西方の海域世界の①という広がりとは、ある意味では南インド、スリランカとここでもって一緒になって重なっているということが重要で、南インドとスリランカというのはそれだけ豊かなのです。それから、モルディブ、ラクシャディープ、ここではイスラーム商人が非常に積極的に活躍いたしまして、アラビア海を航行するダウという船をあやつつた。木造帆船ですけれども、これが東アフリカのほうまで行って、そこでは奴隷が重要な取引の商品であつたということとか、ソコトラとかエチオピアのほうまでダウは活躍して出ていってあります。またそれより逆に、さらに東のほうに行くとジャンクと呼ばれた帆船が、一番遠いところでは広州、泉州というところにまで出掛けていってありますし、ビルマ、インドネシア、フィリピン、マレー、スマトラ。そして香料諸島、ジャワというようなところにまで届いていた。こんなようなスケールの大きな世界地図が書けるのだということです。

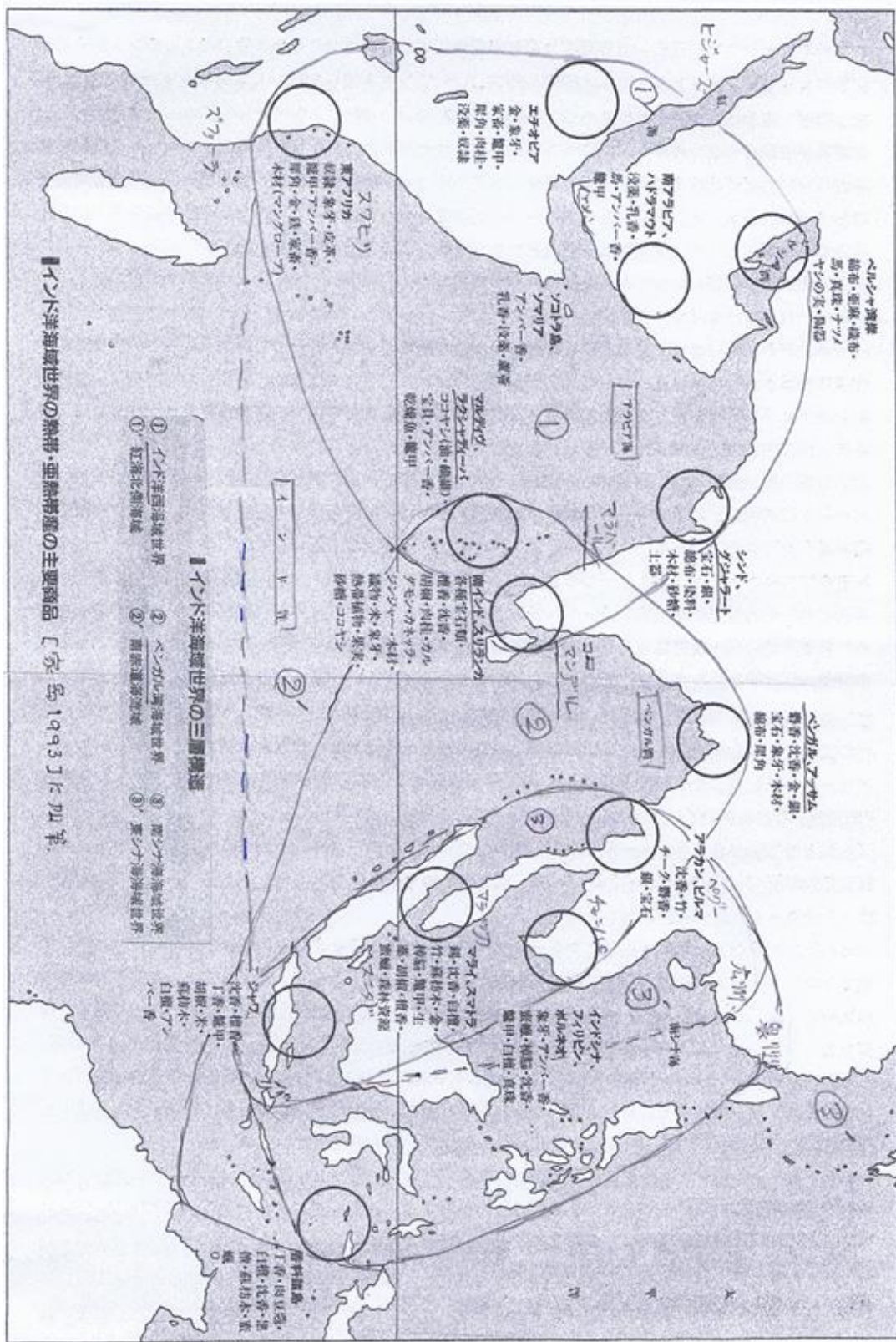


図9 インド洋海域世界の熱帯・亜熱帯産の主要商品 [家島 1993] に小西加筆

以上をまとめてみましょう。定規で引いたような先ほどの概念図(図6)をもう少し現実のインドの地図に重ね合わせて考えてみますと、図10のようなことになるのではないかと思います。ここでもまず、北インド、南インドという分け方をしていますが、単純な二分は避けています。例えば、北インドといえばこれまではイメージとして、インドアリア系の言葉が話しているところというふうに見ていたわけです。ところが、グジャラートという、先程見たこの西の端、またはベンガル、オリッサ、またはバングラデシュというところで話しているオリヤー語、ベンガル語、いずれもこれらはインドアリア系の言葉であるにも関わらず、その文化

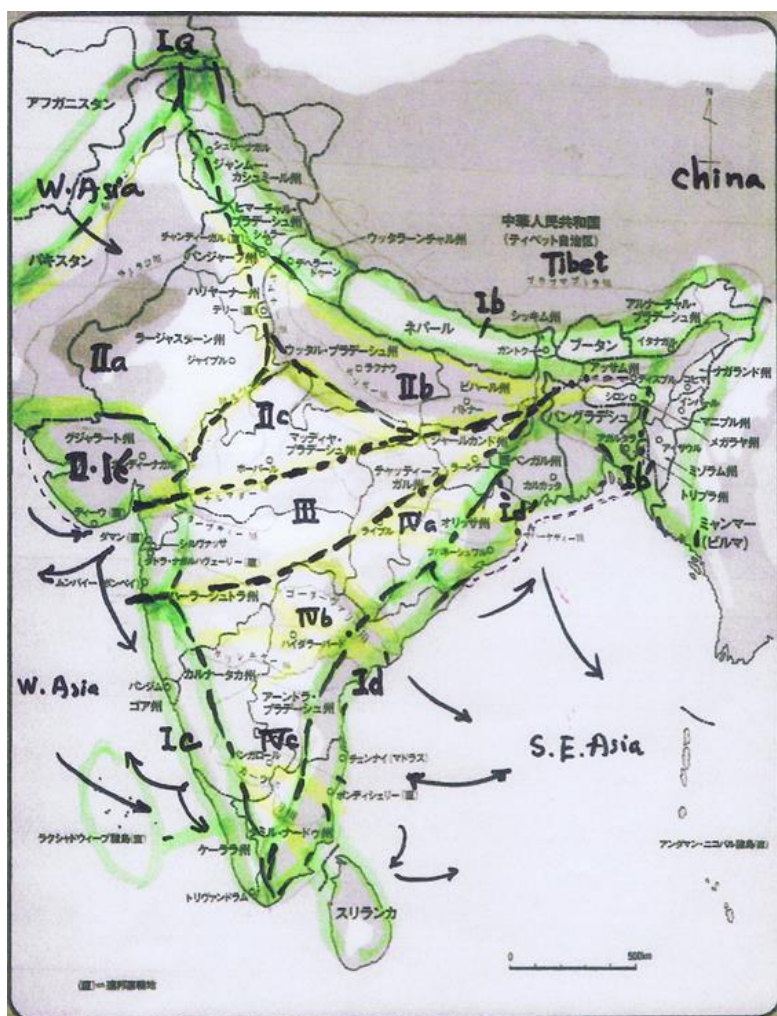


図10

内容を見ると、それはいわゆる北のアーリア系の文化とはかなり違った、さまざまな文化が吹きだまった、しかもそこから海港、海市を発達させた文化の発信地としての役割を、内陸の北以上に持っていたのではないかと思います。私には思えるわけでありませぬ。

特に、バングラデシュというところ、またはベンガル、オリッサでは(これも今ではオリッサとは言わずオディシャーと言うのですが)、その内陸の山岳地帯には原住民がまだに住んでいます。この古層の文化と、もっと南から伝わってくるドラヴィダ文化、また北西から伝わってくるアーリア文化と、この3つが全部一緒になって吹きだまっている、そういう文化の重層性が見られる重要なところであるというふうには思えてなりません。私がカルカッタ大学で勉強したからそう思うのかもしれませんが、ベンガルの重要性というものはとても大きいのではないかと思います。

したがって、ちょっとああいうふうには線でばつと引いてしまうようなものにはならない、より具体的な、現実的な図ができてくるのではないかと。しかし、基本的には、私が1986年に書きましたこの図を基本的に踏まえながらも、それぞれの地域を位置付けたあらたな地図が必要なのではないかと思ひます。つまり、内陸に位置する陸の道としてはなお、この内陸のフロンティアであるIa、Ibという北の屏風のような障壁、その中にはヒマラヤ山脈という非常に

大きなものがどんとあるわけですが、それが平地に降りるとインダス平原のⅡa、さらにガンガー平原のⅡb、そしてそれに囲まれ、やや辺境地帯のⅡc という内奥の地域。そして、その東、西の両端にベンガル・オリッサ及びグジャラート・シンドというような領域の塊がどんとあって、さらにそこから、海との関係を非常に強く持ったベルト状のⅠc のマラバール海岸とⅠd のコロマンデル海岸に、港市を展開させている。特にⅠd の領域では、強力な王朝をも次々と打ち立てていった、そういう豊かな地域であったのです。そして、Ⅰc とⅠd の両方を結び付け、結び合わせるような形として最南端のケーララ、またはタミル・ナードゥ州の南端地域があり、南方の諸文化を統合していったということに注目したいと思います。さらにこの図ではそのさいのモノ・人・情報の動き、あるいは船や物資の動きをかなり思いきって矢印で書いてしまいましたが、どこからどのように文化が入ってきて、どこへ流れていくかというようなことを、はなはだ大ざっぱながら、ここから見ていくことができるだろうと思います。

もちろん大変これは、先に漫談みたいなものと申しましたけれど、一つの考え方、または妄想でありまして、ここからさらに、例えば家島先生や弘末先生が書かれているように一つ一つの海港、海市の果たした歴史的な役割や歴史的展開、またはそこで扱われた物資のあり方というものを、こうしたある種の枠組みを頭に置いた上で考えてみても悪くはないと思います。そしてさらに、その枠組みの中で事実関係を細かく検証していくことが、今後はさらに大事なのではないかと考えております。

上田：どうもありがとうございました。では事実確認などがありましたらお願いします。

聴講者 A：コロマンデル海岸とマラバール海岸がフロンティアっていうのはどういう意味で使っているのでしょうか。一般的にはフロンティアというと開拓最前線のことですが。

小西：外の世界に向けて、一番外界のへりをなしているという意味です。ここでは北では山脈、南では大海というインド亜大陸の「境界領域」をさし、必ずしも「開拓」の意味は含んでいません。

聴講者 B：コロマンデル海岸の河口港市付近では農業も盛んだったのでしょうか。それとも、農業は川の上流部に限られますか。

小西：いえ、河口でもお米がとれました。確かにだんだんと下流に行くに従って、地味も豊かになってはきます。ここではお話しませんでしたけれども、ちょうどモンスーンの影響が一番受けるところは東ガート山脈の東と西ガート山脈の西、そこに雨がどっと降って、米ができるわけです。これだけたくさん米ができる場所というのはほかにはなくて、中部インドでは雑穀が主ですし、あとは小麦ですから。主食はほとんどが小麦です。だから、ライスカレーなどと言いますが、ライスはほとんど食べていないのです。基本的には小麦を食べている世界です。

特に、ここの西ガート山脈はアラビア海を渡ってくる南西モンスーンがこの山脈にぶつかって雨をそこで降らしてしまふ。それでマラバール海岸は非常に高温多湿で、米とココヤシが盛んに栽培されるわけですが、そこを越した内陸部では雨量が年間降雨量 600 ミリから 800 ミリぐらいにとどまります。むしろ非常に乾いています。ですから、デカン高原なんて言うとは何だ

か白樺林があるような、そういうイメージですけど、全然そうではなくて、もうサバンナの荒れた風景、そこで細々と雑穀と綿を作っているという程度の風土です。そして下流に行くに従って、東ガート山脈を越えれば、今度は季節によって違いますけれども、北東モンスーンの影響がありますから、そこで稲作の米がとれるのです。

聴講者 C: インダス川のところで、一般的な平地では水の利用について灌漑が注目されており、必ずしも水運ということに注目されてこなかったというお話があったと思います。例えばアフリカ大陸ですと地理的制約で結構下流に急流や滝があり、ニジェール川にしても、ザンベジ川にしても、オレンジ川にしても、あまり水運には利用できません。しかしインドの場合はインダスもガンガーも、あるいは Id 地域にたくさん流れこんでいると言われていた川も、そういう制約はあまりなかった。水運利用がしやすく、事実利用していたと、そういう理解でいいのでしょうか。

小西: インダス川では、川をせき止めているような滝ですとか、または落差のある地形というのはほとんどなく、ただただ平らです。そこに洪水が起こっても、また土をためていきます。洪水でたまった泥土は水をたっぷり含んでおり、水が引いた後そこで農耕を行うわけですが。灌漑を引いてそこで作物を作るようなことすら必要ありません。滝になるような落差もできず、完全に平らになってしまっただけで前の流路がどこだったかももうわからない。そういう地形なのです。

聴講者 D: ちょっと感銘を受けながら聞いていました。今のところに関連して、日本の江戸時代の運輸というのは、実は舟運が主です。教科書レベルだと、日本の交通って海と海運と、五街道などの街道でしか語らないのですが、実は近世という時代は川の港の時代で、近世の初めに河岸っていう名前もできたのです。川に河岸ができて、だから陸の陸路と海をつないでいるのは舟運なのです。大正ぐらいになると舟運がトラック運送へ変わっていき、更に鉄道に変わっていくのですが、それまでは河岸ってのがごく普通であった。そういうことは教科書なんかではほとんど落としているってことを思い出しながら、このお話を聞いて「ああ、そうなんだ」と思いました。

小西: ありがとうございます。舟運ってというのはとっても大事で、実は私が今住んでいるところが江戸時代の利根川の河岸なのです。ですから、うちの周りを起点にして、利根川べりを行ったり来たりしながら、河岸・津のいくつかをだいたい調べております。とても面白い。今でもそういう運河が大事で、ダシと呼ばれる階段があって、船が着く。そして、米やしょうゆを積み、あるいは下ろして、銚子と江戸を結ぶというような、そのような河岸が、利根川を利用しながらたくさんあるということに気が付いて、少しずつ調べています。

また海に出たものは北前船のようにさらに北へ進むために積みかえられて、またより荒い海へも出ていくのですが、それを支えていたのはもっと小さな川の舟運であり、そのための河岸があったということをお話は実感しております。

上田: どうもありがとうございました。

参考・引用文献

- NHK 取材班ほか『海のシルクロード2』日本放送出版協会、1988
- 辛島昇・大村次郷『海のシルクロード—中国・泉州からイスタンブールまで』集英社、2000
- 辛島昇編『南アジア史3—南インド』山川出版社、2007
- 小西正捷『多様のインド世界』三省堂、1981
- 小西正捷『インド民衆の文化誌』法政大学出版局、1986
- 松田壽男『アジアの歴史』NHK 市民大学叢書 21、日本放送出版協会、1971
- 宮崎正勝『海からの世界史』角川選書 383、角川書店、2005
- 家島彦一『海が作る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社、1993
- KONISHI, M. A. *Hāth Kāghaz : History of Handmade Paper in South Asia*,
New Delhi: Aryan Books International, 2013